

# 身近な課題に取り組み生きる力を育む 地域課題解決型キャリア教育

いま注目を集める、地域と高校の連携。この連載では、地域課題に取り組み、高校生はどう育つのか、また、学校はどのように地域と連携できるのかを探っていきます。

取材・文／江森真矢子

## 教科の力も生かす 地域プロデュース活動で 成長を実感



### 第5回 聖学院高校(東京・私立)

東京都北区にある聖学院は中高一貫の男子校。「Only One for Others」をモットーに、個性や才能を磨いて社会に貢献できる人の育成を目指してきた。今年度、高校3年の総合的な学習の時間でスタートした「北区プロデューサー講座」にも、PBL(Project

Based Learning)を通して課題発見・解決力・マネジメント力を身につけると同時に、社会問題への認識を高め、社会で自分を生かせる人になるという聖学院精神が流れている。

伊藤豊高等部長は「自分と他者、社会とのかかわりを学ぶものとして本校では農村や海外での体験学習を大切にしてきました。5年前には生徒主体の文化祭にするためにPM(プロジェクトマネジメント)の手法を取り入れました」と言う。PMは行事や授業、総合学習にも活用されている。

#### 4クルールの随所で 外部講師と協働

高校3年の総合学習は各教科から1人ずつの教員が担当となり9講座を開講している。数学科の児浦良裕先生が企画した北区プロデューサー講座は35人の希望者が受講。課題発見能力を養う「Mathコミワークショップ」(4回)から始まり、フィールドワークやインタビューを行いながら各自の取り組みテーマを探る「北区のリアルを誰よりも学ぶ!」(6回)、チーム

に分かれてプロジェクトに取り組む「北区魅力化企画を提案する」(7回)。成果は文化祭で発表し、最後に社会人講師との対話を通じた「振り返りワークショップ」(3回)で終わるという内容だ(図1)。

各クルールでNPO、企業人、議員、地元市民などの協力を得て授業を行うが、かかわる人を「社会人メンター」としてゆるくネットワーク化し、SNSで進行状況を共有しながら最後まで協働するスタイルが新しい。

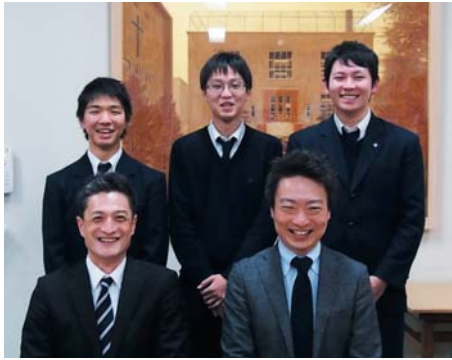
#### 数学的リテラシーを 総合的な学習の時間で

普段の授業でも、数学をコミュニケーションに生かす「Mathコミ力」をつけようと伝えている児浦先生。講座全体を統計で組み立てることも考えたが、問題解決の流れを作るには題材があったほうがよい。「北区は生徒にとつとらえやすいサイズでいい題材になると思います」第1クルールは、統計データから情報を抽出、統合し課題発見する力をつけることを目標とした。

図1 1年間のカリキュラム

目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>●プロジェクト活動を行うことができる。課題発見・解決力・マネジメント力が身についている</li> <li>●北区という地域社会を学習・探求することで、現代の社会問題への認識を高め、大学での学習・事業活動に応用できる</li> </ul>			
時期(回数)	第1クルール 4~5月(4回)	第2クルール 6~7月(6回)	第3クルール 9~10月(7回)	第4クルール 11~12月(3回)
テーマ	Mathコミワークショップ	北区のリアルを誰よりも学ぶ!	北区魅力化企画を提案する	振り返りWS 社会人との対話
詳細	データの抽出~情報整理といった、統計資料から課題発見を行うスキルを向上させる(ケーススタディ) 	町を歩き、ゲストのスピーチを聞き、統計資料等を読み込むことで、北区の特長や課題を発見する 	チームごとに取材やアイデア出しなどを行い、課題を掘り下げ、中間発表を経て観光・地域活性化企画を提案する 	自分たちの考えた企画を社会人との対話を通じて、振り返る 

記念祭で発表



後列左から  
鈴木雄祐さん(3年)、伊藤将大さん(3年)、鈴木龍之介  
さん(3年)  
前列左から  
伊藤豊先生(高等部長)、児浦良裕先生(3学年担任、21  
世紀国際教育部)

## 図2 生徒の声

この学校で学んだことは三つある。(中略：  
一つめは陸上競技部で学んだあきらめないこ  
との重要性。二つめは2年生の時、進路につ  
いて必死に考えたことをきっかけに、変わるう、  
変えようとマインドが変わったこと)。三つ目は、  
高校三年の総合学習である。それはチームに  
分かれてある問題があってその問題をどのよう  
に解決するか企画作りである。私のチーム  
のメンバー達は皆しっかりとした長所があり能  
力が高い者たちが集まっていたと思っている。  
その能力は必ず将来に使う能力であり、今自  
分が欲している能力であった。だから総合学  
習の時間はとても楽しかった。その話し合いに  
居るだけで良い経験になった。その光景を見  
ているだけで学べべき点が多く見つかった。自  
分はまだまだだと思ひ知らされた。自分が部活  
や遊んでいる間に出来てしまった同級生との  
差を埋めなければならぬ。学べべきことがま  
だたくさんあると思ひ知らされた。

将来自分が何をしていくかなんか全然わか  
らない。しかし、今この学校で得た経験は社会  
に出てもきっと役に立つはず。そのためにも今  
この一日一日を大切に何かを得ている無駄の  
ない色づいた日常であると願いたい。

個々人の成長は、社会人メンターの  
力を借りた振り返りでより確かなも  
のとなった(コラム)。問題の本質を  
考えることができる、お互いを尊重し  
協業することができる、社会貢献へ  
の意欲といった成長の手応えを、生徒  
たちは掴んだようだ。

授業では代表値、分散などの概念  
やグラフの読み方を学んだ後、23区の  
統計データを使った学習を行った。個  
人で①出展②読み取れる事実③浮か  
んだ疑問・気づきを記入するデータカ  
ードを作り、それを持ち寄ってKJ法  
やマインドマップで北区の特徴を分析  
していく。すると交通事故の少なさ  
や駅数の多さといった魅力、人口の伸  
び悩みなどの課題が見えてきた。

受講生の鈴木雄祐さんは「統計を  
自分で使えると実感できたのは秋ご  
ろからでした。調査で数字を見てい  
ると何かある、とピンとくるようにな  
ったんです。そのことから、データの読  
み取りを含むような入試問題もかな  
りできるようになりました」講座での  
学びが教科学習にフィードバックされ  
る好循環が生まれている。

続く第2クールでは都議・区議と  
の対話、博物館でのフィールドワーク  
などを行い、生の情報も交えて北区  
の特長と課題を洗い出していた。  
「質問を考え、ぶつけて、また質問す  
るなかで、知っていることも知りたい  
ことも増え、だんだんやりたいことが  
はつきりしてきました」と鈴木龍之介  
さん。生徒たちの課題意識から抽出  
した「交通・鉄道」「商店街」「ものづ  
くり」「福祉・教育」「環境・自然」の5  
テーマ7班に分かれ、「北区魅力化企  
画を提案する」第3クールに入った。

### 目標、役割、計画を決め プロジェクトを推進する

北芸術工科大学の岡崎エミ准教授に  
よる、プロジェクト研修からスタート  
した。伊藤将大さんの印象に強く残  
ったのが、「私がやりたいこと  
(Will・Wish)」「私ができること  
(Can)」、時代が求めること  
(Needs)の3つの輪が重なるこ  
ろが企画になるということ。「自分  
たちのアイデアが3つの輪のどこにあ  
るのかを考えることで質の高い議論  
ができるようになりました」という。

研修後は自分たちで計画を立て、  
フィールドワークや企画、発表に向け  
ての準備を行っていった。伊藤さんと  
鈴木雄祐さんは共に福祉・教育班。  
子どもが高齢者に30年前の北区の様  
子を聞いて、共に30後の未来を、想  
造することで教育と福祉の課題を  
解決するという企画を立案した。

発表に至るまでのプロジェクトの

様子を聞くと「文化祭前は夜な夜な  
SkypeやLINEをつないで資料  
を作っていました。僕はメンター役な  
ので、それぞれのメンバーに意見を求  
めたりデータを求めたり。お互いに役  
割の自覚があると、物事が進むんで  
す」メンバーが信頼しあって、困った  
ら聞こうって、それがよかった」「想  
造」という言葉が生まれた時はもう、  
やったーこれだ！って(笑)」。止ま  
らない話から熱中した様子が伝わっ  
てくる。二人は受験が終わったら企  
画を実行に移すつもりだ。

自分たちの企画を実行したい、とい  
う発言からは実際に社会に関わろう  
という強い意志を感じる。「生徒たち  
が地域や社会を自分ごととして捉え  
るようになったことが、いちばんの成  
長だと感じています」と児浦先生。進  
路に関しても、自分のやりたいことだ  
けでなく、社会にどんなニーズがある  
のか、どうかかわるのかという軸で見  
直した生徒が多くいるそうだ。

### School Data

1903年創立／普通科／生徒数387人(男子のみ)／進路状況(2014年度)大学・短大116人、専門学  
校7人、就職0人、留学39人、その他39人